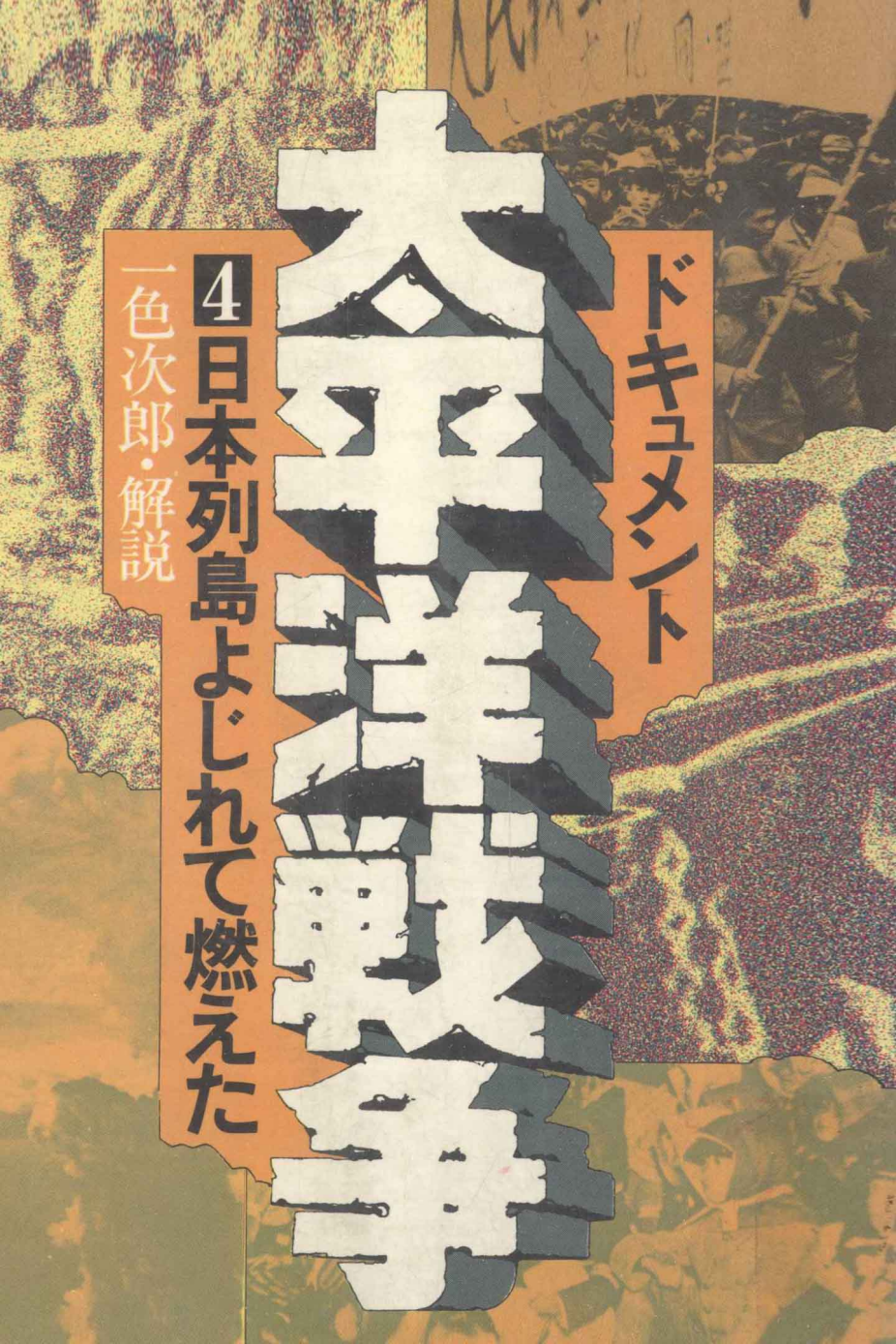




ドキュメント

太平洋戦争

4日本列島よじれて燃えた
一色次郎・解説

ドキュメント

太平洋戦争

4 日本列島よじれて燃えた

一色次郎・解説

〈執筆者紹介〉

- | | |
|------|--------------------|
| 石上正夫 | 東京都，深川小学校教諭 |
| 郷 静子 | 作家，『れくいえむ』など |
| 郷 成文 | 名古屋，丸ノ内法律会計事務所，弁護士 |
| 吉岡時夫 | 京都府，佐濃小学校教頭 |
| 一色次郎 | 作家，『青幻記』など |
| 中沢啓治 | 漫画作家，『はだしのゲン』など |
| 山田 貫 | 長崎県立図書館勤務，詩人 |

ドキュメント大太平洋戦争 第4巻

日本列島よじれて燃えた

1975年6月10日 第1刷発行

解説 一色次郎
発行者 今田保
印刷所 東銀座印刷出版株式会社

発行所 汐文社

東京都千代田区外神田2-3-2
京都市下京区七条河原町西南角

刊行の辞

I

太平洋戦争は、おそらく日本歴史上最大の事件であると言ってもよいのではあるまいか。社会のあり方を一変させた変化の大きさについていえば、無階級無政府、そして野生の動植物を食料としていた原始社会から、階級と支配権力が発生し、農業耕作を主要生産とする社会への移行と、極東の列島にとじこもり前近代の封建社会の伝統の内に埋れていた日本から、世界の資本主義近代社会の潮流の中に身を投じた日本への変貌と、このきわめて遠い時期ときわめて近い時期とに生じた二つの社会構造の変化に比べるならば、太平洋戦争による日本の変化は、あるいはそれよりもひとまわり小規模の変化というランクづけができるかもしれない。しかし、前の二つの社会的変革が、何ほどかの犠牲なしには進まなかったにしても、比較的になチュラルな歴史の発展として完了し、価値判断を加えて言えば、大局的に大きな進歩として評価せられる歩みであったのところが、太平

洋戦争は、日本歴史上前後に例のない惨禍を伴った悲劇であったという点で、他の歴史上の諸事件とはまったく比べることのできない凄絶きわまるできごとであった。

石器時代、少くとも縄文時代から数えて一万年にちかい年月を閲した日本人の歴史の中で、太平洋戦争という比類の無い大事件を体験するように運命づけられた私たち戦前戦中世代の日本人は、この大事件の生証人として、どの時代を生きた日本人よりも、かけがえのない貴重な体験を経ていると言ふべきであろう。その体験は、「御一新」という明治維新を生きぬいて、封建社会から資本主義社会への推移を体験してきた私たちの曾父母や曾祖父母たちの世代の人々の体験と異なり、思い起しただけでさえ心暗くなる辛酸と悲憤と痛恨とにみちみちている。したがって、これだけかけがえの無い体験を身につけながら、ことさらに口をとして体験を語ろうとしない人々も多いという。

私は、その人々の気持を理解することができる。しかし、私たちがその体験を私たちの肉体とともに火葬場のカマドの中で煙と化せしめ、あるいは土葬の塚穴の中の土と化せしめてしまい、ついに体験者が一人も生き残っていない、戦後世代の人々だけの時代が到来するとしたならば、もはやその体験は文字としてまたは写真として、残された記録以外に何も無くなってしまふほかない。戦闘が終ってまだ三十年にしかならない今日でさえ、社会の大半は戦争体験の無い世代で占められているのだ。余生が次第に短くなって行く私たちが、今のうちに一つでも多く戦争体験を客観化しておかなければ、手おくれになる時期が目前に迫っている。私たちの世代の何百万人かが戦火の中に散って行った。死者は語らない。手記や作品を残した死者も多いが、すべてをありのまま感ずるま

まに書きのこす自由の無かった時期に書かれた文章に、すべてがつくされているはずはない。同世代の多くの同胞が戦火に斃れたなかに生き残った私たちには、生ある間に少しでも戦争の真実を次の世代に語り伝える義務があると思う。

以上は私一個人の所見であって、このシリーズの編集責任者でない私に、執筆者諸氏が私と同じような考え方で執筆に当られたかどうかを確めるすべはない。しかし、さまざまな立場にあらわれるこれだけ多数の方々が、この企画の意義を認め進んでそれぞれの主題の執筆を快諾されたのは、たぶん私の平素考えている右のような所見と、同じでないまでもそれほど遠くない動機からではないかと想像し、汐文社から請われるままに、私がかつてに付度した本シリーズ刊行の意義を一筆した次第である。

一九七五年五月三日憲法記念日に

家永 三郎

目次

東京

石上 正夫……1

——初空襲から五月二十五日空襲まで——

ドウリットル空襲

第一期東京空襲

三月十日東京大空襲

東京大空襲とわたし

横浜、川崎

郷 静子……45

昭和十七年四月十八日、京浜初空襲の日

その頃日本は——本土空襲と防空演習——

二十年四月十五日、川崎大空襲——悲劇の記録の中から——

二十年五月二十九日、横浜大空襲——立ったままでも焼け死んだ

私は願う

82	69	60	53	50	45	42	30	16	2
----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

名古屋

——空襲被災の記——

軍需工業都市名古屋——勤労働員の日々——

五月一七日——問題の一夜——

焼夷弾に傷ついて

戦火はなおも

生きのびた私

郷

成文…85

名古屋、舞鶴（京都）

かくされていた空襲

軍隊式の師範教育

学徒動員でジュラルミン工場へ

東海地震後空襲ふえる

名古屋大空襲

名古屋脱出

軍港・舞鶴海軍工廠に再動員

京都最大の空襲、運命の日七月二十九日と

三十日、死者百八十名、負傷者三百数十名

吉岡

時夫…113

131

129

126

120

119

118

115

114

108

104

99

94

86

平岡宏司君「行方不明」

敗戦・動員解除

なごや会の結成・舞鶴を再び軍港にするな

京・阪・神も燃えている

東海・山陽を行く

『かくされていた空襲』

大阪地獄図絵

メリケン波止場の神戸が燃える

難民は行く

広島

——中沢家始末記——

戦争末期——飢えと恐怖の幼き日

原爆が投下された

地獄の中でみんな死んだ

無数の死に出合った

戦争が終わった

一色次郎……159

中沢啓治……217

239 231 226 223 218

202 188 178 170 160 141 138 136

長

崎

生きる闘かい

自力ではい上る

つかの間の安息と底にひそむ恐怖

ロマンの里と富国強兵と

巨艦武蔵と市民たち

兵士たちは通過していく

少年工員たち

空襲はじまる

垂直に燃えつきた

敗戦が不意にやってきた

原子野の聖者の声

観光平和の底に

山田

かん

…

260

251 246 242

解説

一色

次郎

314

306

301

298

287

278

274

269

264

260

東京

——初空襲から五月二十五日空襲まで——

石上 正夫

ドゥリットル空襲

その日わたしは谷中に住む友人のところへ本を借りに行った。「杉本五郎中佐の『大義』を読まなければ、死の覚悟はできない」といわれたためであった。昭和十七年四月十八日、土曜日の空は碧くすみわたっていた。

この年の二月、日本軍はマニラを占領し、次いでシンガポールも占領、街は戦勝祝賀の興奮が消えやらず、ゲートルに身をかためた男達の歩きかたにも力がこもっていた。

ふと上野の森を見上げると、見なれぬ大きな飛行機が超低空で森の樹間から姿をあらわし、不忍の池の上を横切って西の空に消えていった。街を行く人びとは「あれ、変な飛行機が飛んでいるな」と思うていどで余り気にもとめなかった。

子どもたちの人気者の象も、春の陽光に目を細めるだけで、敵機の来襲には気にもとめない風であった。

やがて遠くでドドーンという爆発音らしい震動が感じられたが、余程気をつけないとわからない程度であった。

この日日本は、ドゥリットル中佐が指揮をとるB25中型爆撃機によって初めて空襲をうけた。これがドゥリットル日本初空襲である。

大本營発表

明くる十九日、新聞は次のように初空襲を報道した。

けふ帝都に敵機来襲

九機を撃墜 わが損害軽微

東部軍司令部発表(十八日午後二時)

一、午後零時三十分ごろ敵機数方向より京浜地方に来襲せるも、我が空地両航空部隊の反撃を受け、逐次退散中なり、現在までに判明せる敵機撃墜数は九機にして我が方の損害軽微なる模様、皇室は御安泰に亘らせらる。

この「九機撃墜」という発表には、言論統制下の都民もさすがに首をかしげた。その日は晴天であり、東京上空へ侵入した敵機は十機内外だといわれているのに、撃墜した敵機をみた都民は一人もいなかったからである。「撃墜したのは九機ではなく、クウキ(空気)だ」と巷間ひろくささやかれた。(大本營発表の真相史・富永謙吾・自由国民社)

京 強気一本の軍部も、四月二十日午後五時五十分、次のように大本營発表をしなおした。

3 東

一、四月十八日未明航空母艦三隻を基幹とする敵部隊本州東方洋上遠距離に出現するも我が反撃を恐れて帝国本土に近接することなく退却せり

二、同日帝都その他に來襲せる米国「ノース・アメリカン」B二五型爆撃機十機内外にして各地に一乃至三機宛分散飛來しその残存機は支那大陸方面に遁走せるものあるが如し

三、各地の損害はいづれも極めて輕微なり

この大本營発表は、東部軍司令部の「九機撃墜」の発表を實質的には取り消し訂正したものであり、国民の不信をかうのをおそれ、この失策以後、戦果の発表は大本營で統一して発表するようになった。

この新聞報道をみてもわかるように、ドゥリットル空襲の真相は国民に知らされることなく、長く秘密のベールにつつまれたままであった。

語られざる東京空襲の真相

またこの損害輕微なりといわれたドゥリットル空襲によって、戦局は暗澹たる冬の季節に転落していく大きな原因になったことを、国民は知る術をもたなかった。また、戦局の混乱と敗退は国民の目にふれないままに厳しく進行し、十六、七歳の少年達まで戦場にかり出されるようになっていく敗退が繰り返されていることなど、少年たちは知るよしもなかった。

わたし自身も二年後に東京大空襲にさらされなければならないことなど、露ほども思うことはなかった。

春の陽光に目を細めていた象たちも、一年後の昭和十八年遂に他の猛獣たちと一緒に殺されるこ

とになった。それは軍命令であり、ジョン・花子・トンキーの順で三頭の心やさしい象たちは、涙を流して見まもる飼育係の人びとに見つめられながら、バンザイをするかっこうをして餓死させられてしまった。きつとこの芸をすれば、餌をもらえるものと思ったのであろう。

昭和十八年八月十六日軍命令

〔ジョン八月二十九日餓死、花子九月十一日、トンキー九月二十三日。慰霊祭は
花子・トンキーが死にきれない九月四日。『実録上野動物園』毎日新聞社〕

昭和四十五年、東京空襲を記録する会（理事長有馬頼義が設立され、同会事務局長松浦総三氏が渡米し、米軍の押収資料、米軍資料を集収し、『東京大空襲・戦災誌』全五巻がまとめられる過程において知られざる東京空襲は逐次あきらかにされていった。権力によって秘匿されていた東京空襲の真相は、有馬頼義氏、松浦総三氏、早乙女勝元氏、石川光陽氏らのあの日の炎にもた燃えるが如き執念によって、広く国民の前に明らかにされたのである。

夢声戦争日記

ドゥリットル空襲について徳川夢声氏は、「夢声戦争日記」に次のように書いている。

十七年四月十八日（土曜 晴 温）

空襲警報を聴く。——ははア愈々おいでなすったな！ と思ったが、少しもピンと来ない。

静枝も俊子も、姐やもモンベ姿となり、それぞれ配置についたが、どうも本当のような気がしない。私は寝衣の上に、どてらという例の恰好で、なんとなくモソモソしていた。静枝が池の水を汲

んでは、門の前の樽に運んでいる。私は昨日来、朦朧となったままの頭脳で、キールで買った大双眼鏡を出し、時々空に爆音が聴えると、レンズを向ける。機は仲々、レンズに捕まらない。空は晴れ、白い雲が点々として、庭の八重桜は満開少し過ぎて絢爛を極めている。八重山吹の花も今が盛りである。

高射砲の音が、時々響いてくるが、いかにも間のぬけた感じた。尾久の方がやられたという噂がある。

私は二階の西の窓から、物干台で空を見上げながら洗濯物を干している俊子に、

「一体、本当なのかねえ」

と大声で訊ねた。そんな暢気な声を、近所に聴かれては困る、と妻に叱られる。本来なら私も直ちに防空活動をしなければならぬのだが、さしせまった原稿があるのと、防空演習は女たちばかりで今までやっていたので、表へ飛び出して間諜についてもいけない、と引込んでいた。訳だ。

講談社から電話があり、

「只今、本社の上空をスレスレに通り、早稲田方面に爆弾を落しているのが、よく見えましたよ。如何でしょう。明晩の座談会は？ 斯んな場合ですから中止しましょうか？」

と問い合せて来た。斯んな場合こそ、悠々と座談会をやる必要があるでしょう、と私は答えた。

——やっぱり本当だったのか！

と、ようやく承知出来たものの、空襲というものが、斯んなに穏やかなものだとは、今日まで予

想しなかったことだ。女たちも皆一向平気、子供たちは街路で暢気に遊んでいる。

やがて警報解除のサイレンが鳴り、なんのこったという感じであった。

（『東京空襲19人の証言』有馬頼義編・講談社）

この日記に書かれている「なんのこった」という感じは、一般市民のドゥリットル空襲のうけとり方をそのまま表現しているものであり、大本営発表の「損害軽微なり」と相乗作用をおこし、戦局の逆転、歴史の変転の事実を見落す原因をつくってしまった。

戦後あきらかになったドゥリットル空襲の実態と被害は次のようであった。

【4月18日】 警戒警報発令 8時30分

空襲 12時10分

空襲警報発令 12時29分

解除 15時48分

気象 気温9・7度 風速4㍎（8・3㍎）

風向北北西

来襲機数B25 13機（川崎横浜を含む）